

漱石『三四郎』絵のメッセージ

Junko Higasa 2016.11.6

里見美禰子を描いた「森の女」は、等身大で、正面を向いて描かれている。その姿は三四郎と初めて出会った時の姿である。美禰子は敢てそれを希望した。そこには美禰子のメッセージが隠されている。

あの時、三四郎と出会ったその時、美禰子は美しい着物と華やかな帯を身に着け、髪には白い薔薇を挿していた。教会に通う美禰子にとって、聖母の面に描かれる薔薇は清らかなものを意味し、美しい衣装は自分に与えられている環境と意志の自由を意味する。それがその時の等身大の美禰子—真っすぐに相手と対面した自分だった。美禰子は三四郎の純朴さと寂しさに同情を示した。同情は愛の同類である。

『我が罪は常に我が前にあり』美禰子は悟った。人はいつでも無意識のうちに罪を犯す可能性がある。後に書かれる『こころ』の先生のように、恋は無意識の罪を犯す。野々宮に恋する美禰子は迷える自分の生きる道を求めただけである。それが三四郎を苦しめるとは思わずに。結局、野々宮も三四郎も美禰子の生活を支えるだけの自信がないまま、結婚を諦めた。学問は恋には無力である。

絵は語る。これは生きる道を見つけられずに森の中で迷っていた私です。三四郎さん、あの時あなたの姿を見つけた私に気付きながら「何故救ってくださらなかったのです」三四郎も無意識のうちに、美禰子を傷つけていた Stray Sheep かもしれない。